

都道府県番号	1
都道府県名	北海道

()

学校名及び規模

稚内市立潮見が丘小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	3	2	2	1	14	19
児童数	66	64	54	93	78	79	1	435	

実践研究の概要

<p>・テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通知票や指導要録と連動させた評価システムの確立 ・評価方法の研究深化と評価規準の改善 ・学力テストなどによる客観的な子どもの変容の把握 <p>・テーマ設定の趣旨</p> <p>評価の在り方がいわゆる絶対評価に変わったことを機に、学校全体の評価の仕組みをつくり直すことを通して、子どもの学力のとらえ方の見直しを図り、見取りを工夫する。</p>

実践研究の内容

() 研究体制の工夫

教育課程を作成した教科部会を中心に評価規準の作成を行った。
評価に関する作業量が増えたことに対応しO A化を図った。

() 実践研究の内容

通知票や指導要録と連動させた評価システムの確立

一覧表・通知票・指導要録の関係が一貫したものになるようにした。検討すればするほど、評価のための作業量に時間を費やす毎日である。評価のための評価にしないようにすることも大切になってきた。そこで、O A化を図った。昨年度、学校にサーバーが導入されたので、それを利用した評価のシステムをつくった。

評価方法の統一

学年内で評価方法の統一が図れるように、単元に入る前の打ち合せを綿密に行った。

評価規準・評価方法・指導方法・指導計画の改善

・評価された結果を集計して示し、課題を明らかにしていくようにした。以下のような視点で検討を始めている。

Cの評価が5人以上いる場合	学級間の評価に差がある場合
Cと評価した子どもの指導を充実し、Bに到達できるようにするため、より積極的に指導と評価の改善に努める必要のある判断基準を「学級内にCの評価の子どもの人数が5人以上いる場合」とした。ただし、人数は発達段階や子どもの実態等に応じて考えることとする。	学年内でそれぞれの学級ごとの集計を比較して、大きく差がある場合、学級の実態としての差なのか、評価方法のずれが原因なのか、指導方法が問題なのか、検討してみる必要がある。

- ・ 視点から検討すること

Cの評価が5人以上いる場合	学級間の評価に差がある場合
<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導方法の改善（授業） ・ 指導計画の改善（時数） ・ 評価規準の見直し ・ 評価方法の見直し <p>Cの評価の子どもが多かった原因について検討し、上記の四つから改善方法を考える。</p>	<p>学年で検討し、その原因が学級の実態としての結果なのか、評価方法のずれから起きたことなのかを話し合う。評価方法のずれから起きた場合は、3学期の評価活動に生かせるようにする。</p>

- ・ 検討した内容について

指導時数の改善や評価規準の見直しについては、教科ブロックでの検討を加えて、指導計画や評価規準の改善につなげていく。

学力テストを前年度と比較して検討を行った。

() 成果と課題

各学年の2学期の評価傾向の読み取り

国語・算数とも「関心・意欲・態度」についてCをつけている割合が少ない。

「言語」全体の評価に比べると「漢字」の評価のAの割合が多くなっている。その一方で、ある程度Cの子どもも見られる。つまり、かなりの子どもたちの漢字の能力が伸びているが、その一方でついていけない子どももいることがわかる。

国語の「話す・聞く」領域でのCの評価が多い。

算数の「表現・処理」領域でのAと評価された子どもが多く見られる。特に「数と計算」での「表現・処理」でのA評価の割合が多くなっている。その一方でC評価も若干みられる。計算能力は伸びているが、その一方で理解が十分でない子どももいることがわかる。

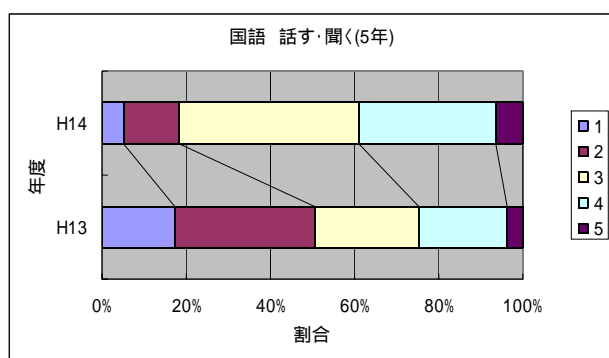
算数の「数学的思考」「知識・理解」の領域でのCの評価がやや多く見られる。この領域の学力は、授業の改善がかぎになる。子どもの実態、子どもの学び方に合わせた授業の改善工夫が求められる。

学力テストの比較

前年度との比較は前年度の同じ学年の比較ではなく同じ子どもの比較、つまり5年生は4年生、6年生は5年生の時の学力検査で比較した。日常的な取組が行われている（ファイト15）領域である国語の「言語事項」、算数の「数と計算」の領域では、5・6年ともに学力の伸びが見られる。

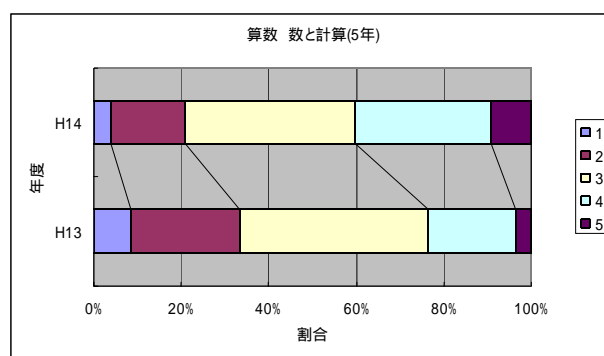
【国語】

5年生では「話す・聞く」「書く」領域及び「言語事項」で伸びが見られる。全体でも伸びが見られる。

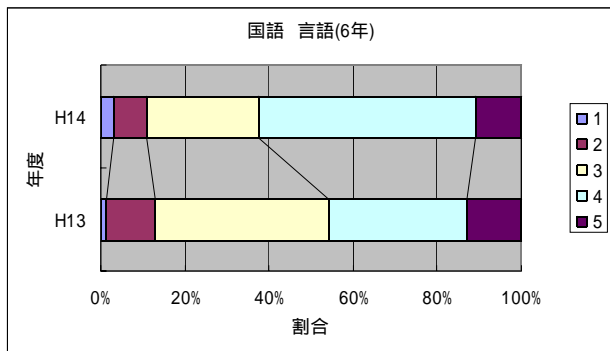


【算数】

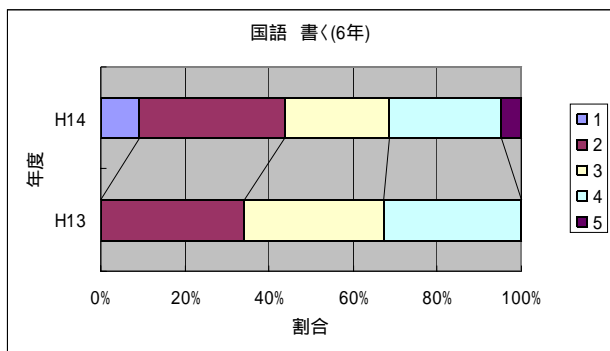
5年生では「数と計算」「図形」領域の伸びが見られる。全体ではほぼ昨年度並みである。



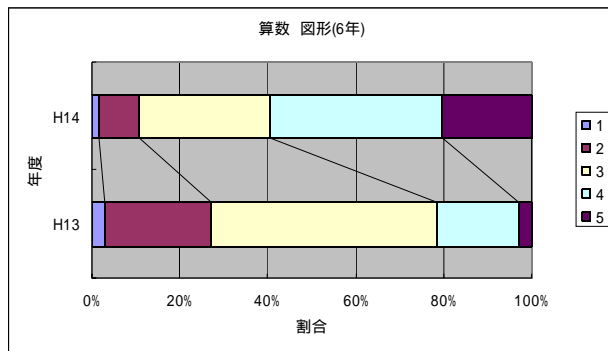
6年生では「言語事項」で伸びが見られる。
全体では、ほぼ昨年度並みである。



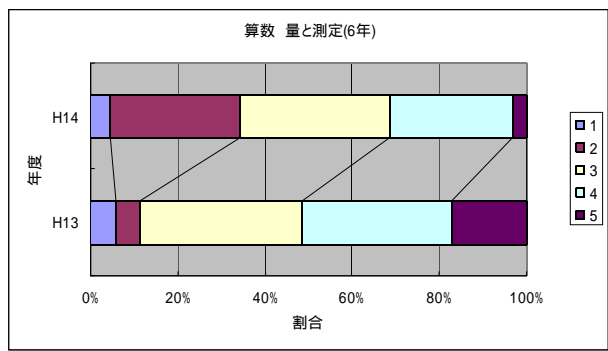
5年生では低下した領域は見られないが、6年生
では「話す・聞く」「書く」領域で低下が見られる。



6年生では「図形」「数量関係」領域の伸びが見
られる。全体ではほぼ昨年度並みである。



5年生では学力が低下した領域は見られないが、
6年生では「量と測定」の領域で低下が見られる。



(注：グラフは処理データの一部である)

() 成果の普及方策

稚内市教育研究会での実践交流

宗谷管内教育課程研究会での実践報告

その他研究会での実践交流

平成16年度 稚内市教育研究大会での実践発表